第１回サンティアゴ巡礼【中】

（２０１６年5月６日～5月１８日）

5月６日（金）

５：００起床。枕の下に２€を置いておいた。チップでーす。

テレビを見る。トルコで何かあった？中国人たちがどうしたって？妊婦と何か病気の話。JIKA 熱だ。それからシリアの話・・・

友人の A さんからメールが来る。返信。牛乳を飲みすぎたのか、お腹がゆるい。

出発。今日の道は歩きやすいせいもあり快調、快調。しばらくは大きな公園のようなところを歩く。そして郊外の広い道に出る。道を間違えかけると地元の人がそっちじゃないよ、あっちだよ、と教えてくれる。

セネガルのジャイカで働いているイトウ・サホさんという３０歳の女性と知り合うがそのうち先に行ってしまう。しかしペルドン峠までは一緒だった。有名なモニュメントの前で写真を撮ってもらう。彼女は今日はプエンテ・ラ・レイナまで行くと言っていた。ところでこのあたりでは「テイクアウト」のことは「アンポルテ」というのだとイトウさんに教わった。

道端に自生する花々。真っ赤なポピーの群生にもこの後よく出会った。

巡礼路で最初に会った日本人、イトウさん。

有名なペルドン峠のモニュメント

峠からの下り道

他に日本人の女性一名と韓国人五、六人にも出会う。彼らの姿は５月２日にも見ている。つまり私は５月５日にバスを使って距離を稼いだが、彼らはちゃんと歩いて三日間で私と同じ距離を進んだということだ。

１５：００、プエンテ・ラ・レイナに到着。イトウさんには出会わなかった。一軒目にあたったアルベルゲは予約がないとダメだと言われた。二軒目で OK。宿泊費は５€で食事はなし。自炊可。しかし人が多く、男女別でもなく窮屈である。尤もアルベルゲが男女別の部屋になっていることはまずない。たまにそういうところに当たれば非常にラッキーである。そしてシャワーも使いにくそうだったのでやめる。洗面所で靴下を洗ってそれで顔と足を拭く。

スペルマルカード（スーパーマーケット）はわりと近くにあったが１７：００まで開かない。スペインにはシエスタという長～い昼休みの習慣がある。アルベルゲ内に自販機があったのでカプチーノを買ってみる。紙コップのである。０・７５€だった。

１７：００になり、ペタンコスリッパ履きで数百メートル先のスペルマルカードまで行く。同じ色の靴下を履けば靴に見えるだろう、ということで。そして一番ペケーニョ（小さい）なパンとハムと粉末スープを買う。全部で２・８３€。人より早めに夕食がすんでよかった。キッチンが混まないうちで。

明日は・・・エスティ―ジャまで２２㎞だ。それを目安にしよう。

スペルマルカードは夕方五時まで昼休みだった

アルベルゲのキッチン

５月７日（土）

午前一時すぎから寒くて眠れず。玄関近くの自販機に行ってみる。小銭をかき集めて０・７５€のホットミルク

を買って飲む。でもあとは０・４８€しかなかったので他には何も買えない。大きいお金は使えないのだ。それで仕方なく朝まで悶々とベッドで過ごす。シュラフがなくてありあわせの衣類を被っているだけというのはちょっと辛いな。

６：００、いち早くキッチンに飛び込み朝食の用意。日本ならば５：００ごろに出発してしまうのだがこのあたりではこの時期でも朝は７：００ごろにならないと明るくならないのだ。でも早く出発する人はかなり多く、すでに廊下などは混みあっているがキッチンはまだ空いている。前日に買ったパンとハムと野菜スープ、あと持参のカフェオレ。しかしカフェインが少なめでも胃が弱っているようなのでやはりきつい。

７：１０出発。今日はエスティ―ジャを目指そう。でも早めに良い宿をゲットするように頑張ろう。

九時ごろから雨に降られる。行き会った韓国人カップルに「ピガワヨ？」（雨が降っちゃいましたね）と言ってみる。その時はポツポツだったが次第に本降りとなる。着る、カバーをかける、など対策に励む。

折よく店あり。雨宿りがてら休憩。小さなスナック菓子とアプリコットジュースと長さ２０㎝ぐらいのいわば超ミニサイズで細いバゲットみたいなパン一本で計１．１€。１０・１€を出してみたらちゃんと９€のお釣りが来た。

雨は小一時間ほどで止む。そのころフランス人らしいマダムに話しかけられしばらく一緒に行くが十二時少し前、バールの近くで休むのか休まないのかはっきりせず周囲をうろうろした挙句、結局中に入るがとても混んでいて時間がかかりそうなので私はお先に失礼する。でもそこから間もなくのところに店があり、そこでパンとバナナとジュースを合計１．５€で買い食べながら休む。ただしそこで買ったパンはまだ食べず朝の残りを食べる。

村々の周辺は坂道が多かったりするが村と村を結ぶ道筋はこのような平野が多い。この花はライラック？
（左の写真の右上の方にある光は太陽や月ではなく写真処理のミスで入った光です。申し訳ありません。）

午後一時半ごろ、エスティ―ジャより３㎞位手前でアルベルゲを見つけて入ってみる。どうやら正解だ。Very good！宿泊代は１０€。シャワーもとても熱くて気持ち良かった。案内されたのはきれいな四人部屋だが二段ベッドなどではなく毛布も借りられた。しかも女性だけの部屋だ。

ある女性が自分の家に電話をしていた。ドイツ語みたいに聞こえたが違うようだ。何語かわからなかったのでどこから来たのか聞いてみた。フランスだと彼女は言った。何だか恥ずかしかった。なぜフランス語に聞こえなかったんだろう？

洗濯機があったので利用した。「脱水」は Spin ていうんだな。自販機でレモンティー０．８€。部屋に持ちこむ時にちょっとこぼす。

夕食はディナーを頼んだ。バールやアルベルゲで提供する巡礼者用の定食である。「メニュー」ともいう。それを食堂で賑やかに食べる。１２€。先ほどの人、フランス人のニコルやアメリカ人のブレンダ、イギリス人のジョアンナと同じテーブル。いろいろと話をした。

二段ではないベッドは珍しい。四人部屋。私は最奥。

ダイニングルームで一緒に食事。

イギリス人ジョアンナとアメリカ人ブレンダ。

ブレンダとフランス人ニコル。

バルコニー。いかにもスペイン。

５月８日（日）

７：００少し前に出発しようとすると雨。そのおかげで部屋にレインコートを忘れたことに気付く。神様、あ

りがとうございます！

エスティ―ジャまでは道がわかりにくいところもあり、一時間ぐらいかかったであろうか。私のレインコートでは対応できないくらい雨風が強くなってきたところで大きな店が出現。アウトドアショップのようで、食品も少しあった。そこで青いポンチョを買う。あとサービス品で１€と書いてあるパン一袋とフランボワーズのキャンディを買う。全部でいくらか？と尋ねると「４５€」とスペイン語で言ったように聞こえた。えっ？“Forty five euro?”と英語で聞き返すと「そうだ」という。高いんじゃないの？と思うが背に腹は代えられない。５０€札を引っ張り出して支払うとお釣りが４５€以上も来た。なんだ、４．５€だったんだ。

でもそのポンチョの着心地はたいへんよろしく悦に入る。風雨に打たれながら涙が出るほど美しい丘陵地帯を歩き続ける。途中で腹ごしらえもする。

ところが三時間余りたったところでポンチョがおかしいのに気づく。調べてみると、なんとポンチョの右側部分が縦に２５㎝幅でまっすぐに裂けて、２ｍ×２５㎝の紐になっていた！これではザックを背負った上からねんねこスタイルで着用することはもうできない。幸い雨は止んできたので我が身だけフードつきの貫頭衣として着用する。勝手に出現した紐は腰に巻く。神様、面白いエンターテインメントをありがとうございます。

だんだんピッチが上がって来る。今まで抜かれる一方だった私が人を抜かすこともあるようになる。それから不思議なのはそれまではなぜか歩行中にトイレに行きたくなることがなかった。いつも朝出立してからどこかの店や宿に着くまで持った。しかしその日は初めて午後二時半ごろだったと思うが外で用を足した。早く歩けるようになり人を引き離せるようになったからこそできたことであった。

途中で見た小さな動物たち。一番左に写っているのは多分にわとりでその右はミニチュアホースの子供かな。

午後三時過ぎ、最初のアルベルゲに飛び込む。予定していたロスアルコスよりは手前だが妥当な判断であろう。公営だか私営だかわからないが、女性スタッフが三人ぐらいでやっている可愛らしい建物のアルベルゲ。ベッド代は９€であった。もうすこし高くて人数少なめな部屋もあったようだったが。しかしディナーも朝も断った。朝食の３．５€はもったいないし、手持ちの食糧もつかわなくてはならない。

ベッドは二段で私は上段。ベッドに入ってすぐ夫からメール。返信するとまた来てまた返信。シャワーは悪くなさそうだが混んでいるし面倒くさいのでやめる。他にキッチンや談話室や洗濯室の設備あり。

午後六時、まだキッチンが空いているうちに夕食に行く。先客は若い男性が一人。一昨日スーパーで買ったパスタ入りスープの素と煮干しと余り物の玉葱四分の一個を豪快にカットしたものを合わせて煮る。ワイルドなスープであった。

５月９日（月）

６：５０出発。雨は降っていないが暫く寒い。最初の６．８㎞、。ほとんど平ら。「何もない」とかいう人もいるだろうが私は好きだ。どんどん距離が稼げる。

サンソルの町に着く。アップダウンが始まる。お店があったのでスモモのような黄色い小さい果物を買う。甘くも酸っぱくもなかったが柔らかくて瑞々しかった。それを二個とトマト一個と、お買い得の１€のハムのパックとカップケーキのようなものを買う。２．５€。トイレもあった。有難かった。

次のトーレス・デル・リオの町は坂だらけ。この町はサンソルと繋がっている。九時ごろ坂を上ったところに、といってもまだまだアップダウンは続くのだが、出店があって椅子もたくさん置いてあって休憩所のようになっていた。ここで少しだけ腹ごしらえ。この先いい場所があるかどうかわからないから。でもただ休むだけでは悪いかと思ってオレンジジュースを買う。２€。スタンプも貰う。

言い忘れていたが前出の「クレデンシャル」はスタンプ帳でもある。ちゃんと巡礼路を徒歩で（自転車や騎馬も可）たどった証拠にアルベルゲ、バール、ホテル、教会などでスタンプを押してもらいながら進むのである。で、その店のおじさんはスタンプと一緒に何かいっぱい書いてくれた。達筆すぎて読めなかったが。

しばらく平らだったりアップダウンがあったりしながら道は延々と続く。昼前から日差しがとても強くなり辛い。それから私のザックの状態が最悪になってくる。荷物が少しずつだが減ってくるほどに重心が下がってきて首が痛くなりもう耐えられない。途中でなんとかザックの改造をしようと試みるがうまくいかず、これはもう一刻も早くもっとましなザックに買い替えねばならないと考える。

１４：００ちょっと前にビアーナという町に到着。「イザールのアルベルゲ」というところに入る。民営だ。ディナー付きで２０€。

夕方町に出て買い物。ものすごい坂だらけの町である。こういうの、スペインやブータンでは普通のことのようだが日本では見たことがない。山の上の起伏だらけのところに村や住宅地があることはあるが、役所や教会や学校や商店街を擁した町があるなんて考えられないではないか！とにかくまずザックを買いたかったのだが折角七時すぎまで開くのを待っていたアウトドアショップにはそれは置いてなくて、雑貨屋に行って買うことになった。そこでノート一冊も買う。（１€）ザックは１８．５€。それから薬屋で爪切りも買った。２．５€だった。でもこの爪切り、ちっとも切れないばかりか数日後にバラバラに壊れてしまい捨てることとなった。ところで今まで使っていたザックはアルベルゲのスタッフさんに頼んで処分してもらった。

５月１０日（火）

６：５０出発。この日はビアーナからナバレッテまで２２．２㎞歩いた。朝から首が痛い。新しいザックの副作用だろうか？

並木道は好きだ。

何という花かは知らないがあちこちに咲いていた。

どこかの村のはずれ。

さっきのピンクの花の白バージョン

古代の建物の廃墟に纏わりつく蔦のような植物

ログローニョの街が見えてきた。

家と花がとても美しかったのだが花が見えない・・・

でも前半は快調でノンストップで次のログローニョという大きな町に入る。町の中の果物屋で黄色いリンゴとネクタリンを買う。（０．２８€）パン屋で細長いバゲットのようなパンを半分に切ってもらい０．４€で買う。それから生ハムの小さなパックも一つ買った。１€だった。

ログローニョの町は広くて通り抜けるのがなかなか大変である。途中、公園の中のベンチで食事をする。が、このとき夕べ買ったばかりのザックの紐についていた留め具（プラスチック製）をうっかり踏んでしまい、そうしたら一瞬でバキッと割れたので驚いた。えっ、こんなことで？日本ではこんな経験は一度もなかった。こちらの雑貨類はこんなにも弱いのか？！このあとでもこの留め具たちは旅の途中で次々と割れ、紐は結んで使うほかなくなってしまった。

ログローニョ市街への入り口にかかる橋、プエンテ・ラ・ピエドラ

この日の昼食に買ったもの

ログローニョとナバレッテの中間に湖というか大きな池があり釣りをするおじさんたちもいた。池の中の小屋には白鳥が・・

ナバレッテの街近くなり、山の上に牛の形のオブジェが・・・

12 世紀のサン・ファン・デ・アクレ救護院の遺跡

ブドウ畑。まだ若木が並んでいるだけ。

午後三時近く、やっと次のナバレッテの町に入るがアルベルゲのあるところまでが長く，上り坂がきつい。そして首が、いよいよただ事ではなくなる。鞭打ち症にでもなったか？という気がする。荷物を降ろして休んであると親切な若い女性と、次にやってきた男性が一番近いアルベルゲまで一緒に荷物を運んでくれた。

そのアルベルゲは食事はつかず、７€。食事、ないのか・・・とがっかりしたがまあいいや。でもちょっと目にはおしゃれできれいなアルベルゲだがシャワーとトイレが離れたところにあって超不便！私のベッドが四階でトイレとシャワーは三階だったか二階だったかにあって、いちいち降りなければならないのが面倒くさかっただけなのだが。もういい、明日に期待しよう。

韓国人のおじさんと会話。私と同い年らしい。

今日の夕食は昼の残りのハムサンドとリンゴ。自炊のためのキッチンはあったので粉末野菜スープと煮干しと、冷蔵庫の中に誰かが残していった玉葱とタコスを電子レンジで加熱したもの。それと粉末ミルクティー。

首が治ればあと五日でブルゴスまで行ける。

５月１１日（水）

首痛は何とか治まり７：００出発。韓国人で私と同い年らしいチャン・ヒ氏という男性は私の縦隣のベッドだったが、彼とはこれまでに二、三回会っている。

干し物をしながら歩く女性二人

首痛を防ぐ方法を考えながら、しかしやっぱりまた出てきた首痛と戦いながら１２：００過ぎにナヘラの町に着く。ここもけっこう大きい町で赤土色の岩肌の山が背後に聳え立っているのが印象的であった。全半はほとんど休む場所がなかったが、後半は二、三度休んだ。町の中のバールでサンドイッチを二種とオレンジジュース（計５．１€）を頼む。トイレも借りる。

本日のランチ

ナヘラの街の背後にそびえる特徴的な山々

ちなみに私はスペイン語でトイレのことを「セルビシオ」と覚えていったがこれまで聞く限りだれもそんな言葉は使っていない。みな「バーニョ」と言っている。これはバスルームまで含めて使う言葉のようである。

そのあと薬屋で小さいハサミ（８．５€）を買う。先日の爪切りよりもこっちの方が役に立ちそうである。それから果物屋でスモモなどを買う。三個で０．６€。

そのあと急に雨！五分で止むが、なんとその直後に雨で濡れた歩道で滑って転倒し左足を捻挫する。痛くて歩けなくなり近くでアルベルゲを探す。しかしそれがとても素敵なところだった。食事がついていないのが残念だ

ったがオスピタレイラ（世話人。オーナーとは限らない。尤もこれはスタッフの中でもチーフの人のことをいうのかスタッフ全員のことを言うのかわからない。男性の場合はオスピタレイロという）のマリアさんという女性がとても親切で世話好きな人だった。私の他に女の子が三人の可愛い部屋に案内された。１５€であった。

私はベッドの下段。１５€したが綺麗な快適な部屋だった。食事つきならもっと良かったが・・・

それにしてもあの転倒事件は何だったのか？どうしてあんなところで転んだのか、全く腑に落ちないのである。まるで神様がいたずらでちょっと水を撒いて私をすっころばしたとしか思えないのである。キャラバンシューズを履いていたし道がぬかるんでいたわけでもなく走っていたわけでもなく大きな町のちゃんとした舗装された歩道の上を普通に歩いていただけだったのに・・・。強いて言えば荷物が重かったせいか？というくらいで。

もしかしたら私を快適な宿に案内してくれるためだったのかもしれない。洗濯も混んでいなくてすぐにでき、（３€）乾燥までもしてもらった（３€）。シャワーも今までの中で一番まともだった。

さて明日はどうするかであるが、次のアフソーラまでも歩けないようだったらその次のサント・ドミンゴ・デ・カルサーダまでバスで行こう。夕食はサンドイッチ。転ぶ前にバールで食べたのの残りであるが、大きくはないのに中のチーズがたっぷりで満腹した。しばらく何も食べなくていい感じである。

５月１２日（木）

もっと早くから出発する人たちが多かったが私は７：３０ごろまでロビーで待機する。ちゃんと明るくなってからバスストップの場所を確認するためである。橋を渡ってすぐのところにあったが時刻表の読み方がよくわからない。人に尋ねてここで待っていれば大丈夫そうだなと考える。

７：５０ごろサント・ドミンゴ・デ・カルサーダ行きというバスが来る。１・６€と聞いて小銭を数えていると運転手さんがイライラした様子を見せる。発車すぐから雨が降り出す。あっという間にサント・ドミンゴに着いた。停留所では大勢のカミーノが雨宿りをしている。私もそれに混じって一時間ほど待つがまだ止まないので次のベログラードまでバスで行ってしまうことにする。

９：３０ごろブルゴス行きのバスが来る。ベログラードも通る。ベログラードまで１．５３€。途中から見覚えのある若者が乗ってくる。彼は一昨日同じ宿に泊まっていた。何だかおちゃらけた感じの男であった

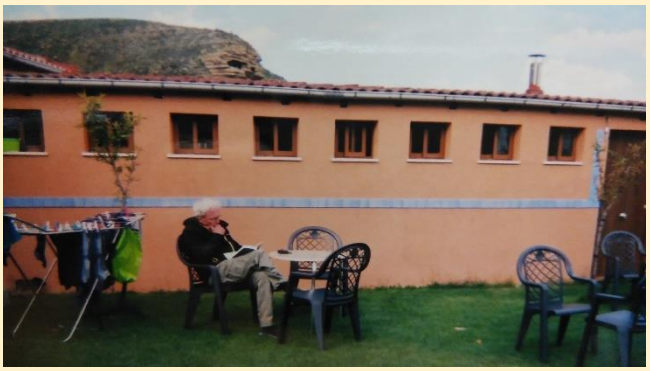
１０：００ごろベログラードに到着。まだ雨は止まない。目の前に二つ星ホテルがあるが、でも足が痛いだけであとの体調は問題ないのだ。ここで泊まるのは時間的に勿体なさすぎる。それでとりあえずバールを探して腹

ごしらえをする。トルティージャ（スペイン風オムレツ）とカフェ・コン・レチェで２．４€。そのあと雨が上がったので４，７㎞先のトサントスまでゆっくり歩くことにする。とても気持ちの良い楽な道で、一時間四十分で着いた。

こういう橋はよく見かける。可愛らしい佇まいで心がなごむ

バール兼アルベルゲがあったので入る。でもセニョーラが忙しく、なかなか宿泊のチェックインをしてもらえない。それで先に食事をすることにする。チキンサンドイッチとオレンジジュースと翌日の朝食用にカステラを買い、全部で６．５€。そして手続きはまだだがベッドに案内される。ラッキー！毛布もある。家にメールをする。

ランチのサンドイッチ。カステラは翌朝用に。



ちょっと風変わりでお洒落で可愛らしいアルベルゲの中庭の風景

１７：００、チェックイン手続きが済む。もっと前でもよかったようだ。ベッド代だけで１０€。ディナーは１２€。ディナーの時スープとターキー料理のセットを頼んでみた。カナダ人二名、ハワイから来た一名という女性たちとテーブルを共にした。名前は聞かなかったが皆フレンドリーであった。私は先方から聞いてこなければこちらから自分の名前を言ったり相手の名前を聞いたりしないのである。

ディナー。右手前がターキー料理。

カナダとハワイからの女性たち。

今日は道中、韓国人カップルにも出会った。先日のカップルとは違う人たちである。ところで韓国人はカップルやグループで来ている人たちが多い。欧米人もカップルはいるがたまに、という感じである。グループで動いている人たちでも、どうやら元からの友人ではなくて現地で知り合って一緒に動いているような感じである。

５月１３日（金）

サン・ファン・ド・オルテガまで歩く。足は治っていないが歩けないことはない。そしてそこのアルベルゲに着いたら私を最後に「コンプリート」（満員）になる。ラッキー♡と思ったが二段ベッドの上段をあてがわれたので上り下りが大変だった。手すりがほとんどなくて怖い。

それにいつも思うのだがシャワーのことだ。欧米人は強い！よくあんなシャワーで平気だなあ。私はあんなのを使うくらいなら着替えもシャワーも無しで四、五日我慢する方がましだ。ベッド代は７€。ディナー８，５€。

午前中の話だが、立ち寄ったバールで生ハムとチーズの入ったサンドイッチと菓子パンとカフェ・コン・レチェで４，５€。そこで、以前にも会ったことがあるのだが韓国人グループと一緒に行動している一名の日本人女性に再会。イトウ・サホさんもこの人のことは知っているようだった。この日本人女性は韓国語はわからないそうで、グループの人たちとは英語でコミュニケーションをとりあっている。しかし私がサン・ジャン・Ｐ・Ｐ以来出会った日本人はまだイトウさんとこの人だけ。それに対して韓国人には十人以上出会っている。いかに日本人が時間に不自由なことであるかがわかる。

モンテス・ド・オカ（オカの山）の頂上

スペイン内戦の碑らしい

松林の中にあるトーテムポールの群れ

これもまた出店のようなものらしい

そこここに美しい菜の花畑

サンファン・ド・オルテガでのディナー

アルベルゲに入った後、風邪をひいたような感じになる。頑張って食事をして毛布を二枚かぶって寝る。二、三時間したら寒気は取れたがセキが出る。風邪が流行しているのだろうか？寝室のあちこちでセキの音がする。

特に私のベッドの下段にいる「パコ」と呼ばれる男性がひどそうである。オスピタレイラが時々世話をしに来ている。そして彼の友人たが見舞いに訪れ大声で話していく。「大丈夫か？」「しっかりしろよ」「元気出せ」とか言っているんだろうけど、うるさい！、静かにしてほしい。

ところで食事の時にまたチャン・ヒ氏やそのグループの人々に出会った。小学生ぐらいの女の子もいた。今まで気づかなかった。普通カミーノの人たちはグループでもいつも一緒に行動するとは限らず、折々に連絡を取りながらそれぞれのペースで歩いているのかもしれない。

５月１４日

朝起きたらほとんど声が出なくなっていた。アララー～。

七時ごろ出発したが、間もなく昨日の韓国人グループの中にいた十歳ぐらい（もう少し下かもしれない）の女の子とその母親の二人連れに追い越された。三十代ぐらいのきれいなお母さんと、後からわかったがウナちゃんという名前の女の子である。せっかくだから二言、三言でも会話できればよかったのだが私は生憎のどを痛めて声が出ない。何とかそのことだけを告げて別れた。

子供連れでも私よりも足が速い。こちらはケガをしていて荷物も重い、ということもあるのだが。

「おばさんはのどが痛くて声が出ないんだって。」

と母親が娘さんに告げているのが聞こえた。

朝九時過ぎ、開いている店があったのでホットミルクを頼む。ミルクだけでコーヒーとかはいらない、という時は「レチェ・ソロ」という。（ブラックコーヒーの時は「カフェ・ソロ」と言うのだ。）１．５€だった。親切にはちみつを入れてくれた。

この日はオルネバッハ・リオピコという村まで歩いた。平坦な道が多く距離もたったの１３．３㎞。十二時半ごろ到着したのだがその割にはとても疲れた。

中盤で、どちらに行くべきか判断しかねる分岐点があった。おそらくどっちにいっても最終的にはブルゴスに着くのであろうが右に行く人が多かったようだ。私も右を選んでみた。でもそのあともはっきり気づかなかったがまた分岐点があったようで、私はあまり人がお行かない方を選んでしまったのかもしれない。後半は人に会うことは全くなく延々と続く畑の中のあぜ道のようなところをやっと抜けてオルネバッハ・リオピコの村に着いたというわけである。

まずアルベルゲを探さねば、と私は通りすがりの若者グループに尋ねてみるが「そんなの、ないよなあ？」という感じである。英語はほとんどわからないらしい。そんなぁ～と思いながらも諦めずに道を進んでいくと、アルベルゲ兼バールのような店があった。入って「泊まれますか？」と尋ねてみるとＯＫだという。しかし声は出ない英語はほとんど通じない、というわけで会話をするのはかなり難儀であった。そしておなかがとてもすいたのでその店でお昼をいただく。トルティージャとオレンジジュースで４，７€であった。

そこに着くまでには山の登り下りもあったが平坦な道の方がずっと長かった。でもそれでも辛かった。のどの痛みとまだ治らない足首と。荷物はわずかながらでも少なくなってきているはずなのに何でいつまでも重いんだ

ろう？だんだん荷物のバランスが悪くなっているのかな？

案内してもらった二階の部屋は、なんと今朝がた別れた韓国人母子のお二人と同室だった。他にも部屋はあったが私とその母子以外に泊まる人はいないようだった。

パスポートチェックはどのアルベルゲでもホテルでもやるのだが、そこでは何だか照合だかコピーだかをしなくてはならないのでしばらく預かる、後で返すと言われ少々不安になった。そして何時間たっても向こうから返しにきてはくれず、夕方「パスポートは？」と聞きに行ったら用事は済んでいたとみえてすぐに返してくれた。

お母さんがそう呼んでいたので名前がわかったのだが、ウナちゃんはよく歩いているとはいえやはり子供だ。到着後ベッドで寝入ったままなかなか起きない。お母さんが

「そろそろシャワーを浴びなさい。夕食にピザを食べるんでしょ？シャワーを浴びないで行くとおじさんに『汚いなあ』と言われるよ。」

などと声をかけているがなかなか起きない。

私は午後七時過ぎに下の店にディナーをいただきに行く。今まで他の人がサラダを食べているのを見て食べたくてしかたがなかったのだがあえて頼まないでいた。過去にドイツやフランスで大量のサラダに辟易した経験があったからである。でもその時は意を決して頼んでみた、エンサラーダ・ミクスタ（ミックスサラダ）とパエリヤを。１０€であった。

ところがやはりサラダはとてつもない大皿に盛られていて、これは日本なら三、四人前の量である。しかも塩が利きすぎていて甚だ食べにくかった。一生懸命食べたがいくら食べてもほとんど減ったように見えない。とうとうギブアップする。そして「多すぎますよ！」と言ってみたからかどうか、次に出てきたパエリヤは日本のものと同じくらいのサイズだった。

前夜のサン・ファン・ド・オルテガのアルベルゲでのディナーでも実はパエリヤが出た。しかし二回とも、日本で聞いている「本場のスペインのパエリヤ」とは感じが違っていた。はっきり言えば、適当に作ったリゾットという感じだった。こちらでは普通のことなのかもしれないが、米に必ず芯が残っている。米の表面はぐちゃぐちゃなのに、である。ご飯の炊き方として、日本人としてはどうしても「下手くそ！」と感じてしまう。でも味は「ああ、スペインだ。」という感じだった。何かピリッと辛みが利いていて、その晩の私の体を温めてくれ、寒さをしのいでくれてよく眠ることができた。

そのディナーを、「ごちそうさま、もうおなか一杯なのでデザートはいりません。」と打ち切ったら店のセニョーラ（セニョリータかもしれない）は大変困惑した様子でパンかごをひっくり返したりナイフを落っことしたりした。デザートやコーヒーを断る客なんて天地がひっくり返ってもありえないようなことだったのかもしれない。

寝室には二段ベッドが二つ置いてありトイレとシャワーは隣の部屋、というわけでとても便利だったのだが残念ながら毛布はなかった。でも厚着をして上にレインコートとポンチョをかけただけでもちゃんと眠れた。
ところでウナちゃんとそのお母さんがいつごろディナーを食べに行ったのかはわからなかった。私が下の店で食べていた時には二人の姿を見かけることはなかった。

５月１５日（日）

韓国人母子、朝六時前に出発。それでその後一時間個室状態になる。私は七時ごろ歩き始める。間もなくブルゴスに着けるはずである。

しかし間もなくよくわからないところに入り込む。農地の中を長いこと歩く。どこかで間違ったんだな、とは思うがブルゴスに近づいていることは確かなのでそのままずっと長い長いフェンスの内側を行く。フェンスの外側には立派な道があるのだがどこまでいってもフェンスの出入り口が見当たらない。そのうち何とかなるだろうと思いつつもかなり不安であった。でも幸い７：４７にフェンスが途切れて巡礼路と合流する。

ブルゴス市街の少し手前で発見した日本の四国巡礼についてのチラシ

やがて公園のようなところに入る。そのうちはっきり公園だとわかるようになる。自転車、といってもカミーノのではなく地元の人たちの自転車がとても多い。ジョギングをする人も多い。そうか、今日は日曜日か。ウォーキングの人も多いがみな地元の人たちでカミーノにはほとんど会わない。多分私と他の人たちと、今朝の出発した場所や時間がずれているせいだろう。でも公園を抜けるまでに一人だけカミーノと出会った。

それにしてもスペインの大きな町の公園というものは、ログローニョでもそう思ったが広い、広い。いつ終わるのかわからない感じでうんざりするくらいである。日本では公園が広すぎてうんざり、なんてありえないだろう。ここは公園の中を歩くだけで十分ハイキングになる。

ブルゴスの市街。なぜか町中が自転車だらけ。パレードのようなこともやっていた。

１０：５０ようやく公園を抜けて市の中心部に着いたようだった。が、ブルゴスの鉄道駅に着くまでがまた一苦労だった。何せ英語が通じないのだ。私も「鉄道駅はどこでしょう？」くらいスペイン語で言えるのだが問題はそのあとだ。「あっち」「こっち」くらいで会話が済めばよいがスペインの方々はみな親切で一生懸命言葉を尽くしてスペイン語でまくしたててくれるのだ。こっちが彼らのいうことを全く理解していないのがわからないものだろうか？英語がわからないならもういいです、グラシアス（ありがとう）！と言って次を当たりたいところなのだがなかなか開放してもらえない。

それでもやっと話を理解して市内バスに乗り、１３：００過ぎにブルゴス駅に到着した。バス代１€でずいぶん走った。（バスに乗る前にバールで食事をした。クロケッタとカフェ・コン・レチェとカップケーキで３．７€。クロケッタというのはいわゆるコロッケだが、大きさは日本のものと同じぐらいだがどっしりしていて私にはそれで十分昼食になるボリュームであった。）地元の人たちはあまり鉄道を利用しないらしく駅構内は閑散としている。それに日本ならばすぐに目につくところに貼ってある路線図とかも見つからず、アストルガまで直通で行けるのか窓口で聞かないとわからない。

ブルゴス駅の構内　　建物は大きいがあまり人はいない

ところでなぜここから列車に乗るのかというと、私にはやはり荷物が重すぎて一日平均３０㎞は歩けないということがはっきりしたからだ。しかしこの巡礼路をちゃんと歩いたことが認められてゴールで証明書を貰えるには最低限最後の１００㎞は徒歩で行かなくてはならない。そして私には帰国の予定日というものがある。マドリードからパリ経由で日本に帰る飛行機とそのマドリードに向かうための列車もサンティアゴから予約してある

ののでそれに間に合わねばならないのである。行程中の宿だってどこでもすんなり見つかるとは限らないので、かなりの余裕も含めて確実に到着できるようにと考えると列車の利用は必要であった。

それからゴールすること以外に私にはもう一つ目標があった。ここからしばらく先に「クルス・デ・フェーロ（鉄の十字架）」という名所がある。そこは巡礼者が国元から持参した石を積んで行くという風習がある場所である。私もそのために日本から石を二個ばかり持ってきていたのでそこは是非とも通過したい。しかし鉄道やバスは必ずしも巡礼路のそばを通っているとは限らないのでそういう交通機関を利用できる部分は限られている。

そこでいろいろ調べた挙句、私はブルゴスからアストルガまで鉄道で行き、アストルガからクルス・デ・フェーロを経てポンフェラーダというところまで歩き、そこからサリアというところまでまた鉄道を使い、サリアからゴールであるサンティアゴまでの１０５㎞を歩くことにしたのである。

アストルガまでの運賃は２９．５€であった。切符を買った後、自販機でジュースを買おうとしたら（１．４€。）お金だけ取られて品物が出てこなかったので近くにあったカフェテリアに申告したら同じジュースを渡してくれた。

ブルゴス発は１５：２５。待ち時間として二時間半というのはさほど辛くない。（日本でだったら辛いだろうな。）少したってからさっきのカフェテリアで夕食用にトルティージャのサンドイッチとオレンジを一個、３．２５€で購入した。アストルガには１７：５５に到着した。

アストルガ駅前、「何もなさそう」に見えて心配したが幸い二つ星のオスタルが見つかる。４０€であった。パンプローナの高級ホテル以来十日ぶりの個室である。可愛らしい部屋だった。シャワーだけでバスタブはなかったがバスルームがやたら広かった。なぜだろう？洗濯物を干すための部屋なのかな。

１９：５０、ピンチ！充電器の変換プラグの「Ｃタイプ」がない！前の宿で落としてきたのだろうか？どう探しても見つからないのでそれまで「なぜだかわからないけど使えない」と思っていた電池式の充電器に再チャレンジ！すると電池のはめ方を間違えていただけとわかり問題なく使えた。ヤレヤレ・・・だってそれまで宿では照明が不十分で細かい字などがよく見えなかったから。でもバッテリーは極力節約しなきゃ。ヘッドライトもよく電池を食うし。ヘッドライトはアルベルゲで夜トイレに行く時とか早朝に身支度をする際の必需品なのである。

残金を初めて数えてみた。（私は人前でお金を数えたりしないことにしている。都会の駅の構内で地図を出したりもしない。不案内な旅行者であることがまるわかりで危険だからである。そういうことをするときにはトイレに入る。）１１０３€と小銭少々であった。出国時に１５５０€あったから、いままでに４５０€くらい使ったわけだ。交通費とザック、ハサミ、爪切り、ノート、それから食費などで。

５月１６日（月）

この日はラバナル・デル・カミーノまで２０．３㎞歩いた。アストルガの町から少し歩くと赤レンガを敷き詰めた道が美しい。８：３０ごろバールでクロワッサンとカフェ・コン・レチェで２．７€。道はほとんど平ら。山登りかと思っていたので拍子抜けした。でも最後の２，３㎞がきつかった。荷物が下がってくるからだ。登り道だったし。韓国人の五十九歳の女性と話をしながら登る。が、きつい。苦しい。

午後二時過ぎにラバナル・デル・カミーノの村に到着。今晩もオスタルがいいな、と思ってあたってみるが予

約がないとダメ、と断られる。仕方なく近くのアルベルゲに行くと、とてもいいところだった上に宿泊費はドネイション（寄付）のみでいいということだった。ラッキー🖤　でも１０€入れた。あまり少ないとバチがあたりそうだったから。

アルベルゲのそばにあった教会。巡礼だというのに私は歩くのに精一杯で道中の教会詣では一度もしていない。

そこはシャワーも悪くないし洗濯機も脱水機も干場もある。キッチンもトイレも洗面所もとてもきれいだ。中庭やサロンもある。オスピタレイラら女性スタッフが三人いてとても親切。食料品を買いに行きたいと言うと近くの店まで案内してくれた。

こちらに来てから私はわりと皆に親切にされる。「小さな異星人（Ｅ．Ｔのような？）」という感じで珍しいのだな。食料品はインスタントラーメン、野菜、クラッカーで３€。それから櫛を２€で買う。持っていたはずの櫛が見つからなくなったのだ。（後日、出てきた）明日はエル・アセーボまで行こう。

５月１７日（火）

今日は重要ポイントのクルス・デ・フェーロを通過する日である。

今朝は朝食付き。パンとジャム、マーマレードとミルクティー、コーヒーもある。高いホテルでもそうだったりするのだがコンチネンタル式の朝食というものはおしゃれではあるが日本人や、多分西欧人以外の他の国の人々にとっても物足りないのではないかという気がする。が、このことについては５月２日のところでふれたので省略する。でもタダで出してくれる朝食に文句をつけるわけにはいかないので有難くいただいて出発する。
荷物をぎゅっと締め付けて身体に密着させようとすると最初はいいが後半苦しくなるのでほどほどにしなくてはならない。１８．８€のザックももう限度だ。５月９日に捨てた二千円のザック（Ｒというスーパーで買った。）より五百円分だけマシなだけだった。帰ったら今度こそいいザックを買って来年こそリベンジしなくてはならない。

フォンセバドンというところまでノンストップ。８：４０に着いて少し休憩。さらに２㎞でクルス・デ・フェ

ーロ、９：４０着。日本から持参した石を積み、十字架と並んで立つ姿をそばにいた人に頼んで写真に撮ってもらう。９：５５出発。

クルス・デ・フェーロにて。飛行機雲みたいなのは余計な光が入り込んだだけです。すみません。

次のマンハリンというところには変わった店がある。宗教的グッズの土産物屋という感じか。チラ見しただけで通過。

マンハリンというところにある奇妙な店

エル・アセーボの村まではけっこう長かった。苦しくなり休み休み行く。十二時ごろ移動販売車でオレンジジュースとサンドイッチを買い、テーブルや椅子も並んでいたのでそこで昼食。３．５€だった。そのサンドイッチは日本によくある、薄切り食パンにレタスとトマトとハムとチーズをはさんで三角形に切ったものだが私はヨーロッパでは初めて見た。二年前ドイツやヨーロッパを通った際にも見たことがない。こちらにもこういうのがあるのね。でも食パンの味は日本の流通品とは違って素朴な味であった。

ヨーロッパで初見の三角切り食パンサンド

こういう休憩所でした。

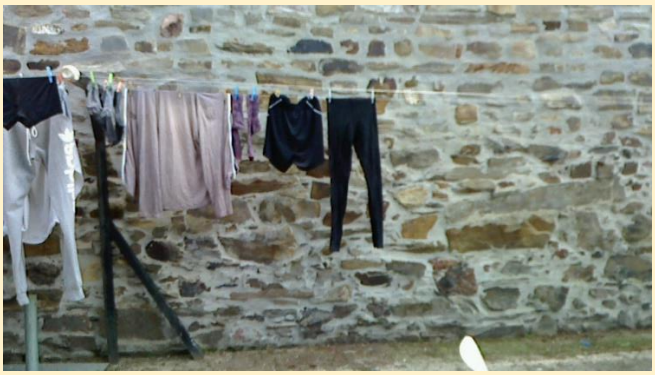
エル・アセーボの家々は皆青い屋根である。珍しい。これまでたいがいの村や町では家々の屋根の色は赤系統であった。（尤も大都会では大きなビルディングが林立している。）

この先の坂道を下っていくとエル・アセーボの村

その１kmくらい手前の石だらけの下り道で私はふいに前につんのめって転び、頭の上にザックが覆い被さってしまった。近くにいた三、四人の人たちがすぐさま助け起こしてくれたが、いや、びっくりした。ちょっとパニックになった。それで動揺が収まるまで少しその場で休憩してからまた歩き始める。

この村でもオスタルはちょいちょいあるが予約が前提らしい。仕方がない、アルベルゲでいいか・・・。幸い良さそうなバール兼アルベルゲがあり、７€で入る。私が入ったところでコンプリートだった。

それにしても、他に不満はないのだが何故ベッドにほとんど手すりがないのだろう？上段なのに、困るじゃないか。物が落ちるよ。シャワーも悪くなさそうだけど、けっこう宿泊客が多くて面倒くさいからやめてしまった。でも洗濯はしっかりやった。
物干し場が素晴らしい！広い中庭でとても日当たりが良くあっという間に乾きそうである。それからこの時初めて「ああ、そうだったのか」と納得したことがある。それは欧米の物干しのためのワイヤーのことである。日本のように物干しざおを使ったりしないのに、なぜ外国ではあんなにただの紐に洗濯物をただ洗濯ばさみで止めるだけですむのか？紐がたわんだりしないのか？と不思議に思っていた。しかし実物を見て納得した。あの紐はビニールロープなんかじゃなくて電線のようにぴんとしっかり張ることのできる鋼のワイヤーだったのだ！



レストランと宿泊棟の間に中庭があって、洗濯物も干せるしなかなかよかった。

それからオーナーのお子さんらしいクリスティンという名の一、二歳の男の子がチョロチョロしているのが可愛らしかった。アルベルゲの入り口に自動販売機が置いてあり、私はそこで翌日の朝食用に菓子パン０．９€を買い、ホットチョコラ―テ（ココア）１€も買って飲んでみた。それを見ていたクリスティン坊やが自動販売機に興味津々。ガチャガチャいじっていたが小さい子には無理ねー、残念だねー。
ディナーが１０€。フライドエッグ、とあったので「目玉焼き」のことだよね、そのくらいがちょうどいいと思って選んだら「揚げ卵」の方だった。油の中に生卵を落としてチリチリになるように揚げたものである。それにフライドポテトがついていた。
デザートは「アナナス」を頼んでみた。パイナップルのことである。甘ったるいケーキや直径１０㎝の巨大なプディング（人が食べているのを見た）よりはマシだろうと思っていたが、缶詰のパイナップルのかなり大きいのが二切れ来た。私には多すぎて半分残してしまった。食後の紅茶は水と一緒にしてこっそり持ち帰る。飲みきれなかったし、寝ている時にのどが渇くからである。（私は眠れなくなりやすいので午後一時以降はコーヒーもカフェオレも飲まないことにしている。）

前菜がパスタでメインがフライドエッグとフライドポテト。日本のものに比べるとラフな盛り付けである。

今日は１７．２㎞しか歩かなかった。明日はポンフェラーダまで１５．８㎞。そこから列車に乗って明日中にサリアまで行けるだろうか？

５月１８日（水）

この日はポンフェラーダまで１５．８㎞。十二時ごろに着かないかなと思っていたが十三時までかかった。どうしても荷物が後ろに引っ張られるんだもの。何でこうなるのか？後半になると必ずそうなる。

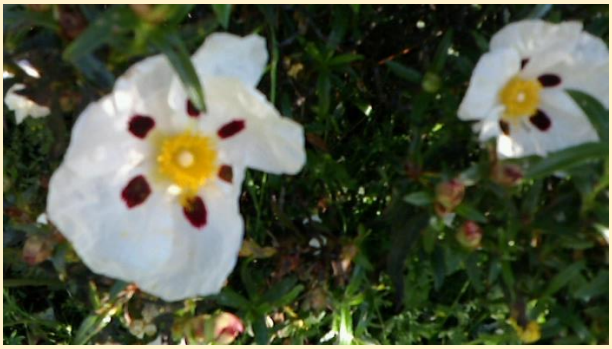
朝は前日自販機で買った菓子パンを食べて出発した。そして９：３０くらいに広い庭のような場所に来た。そこに出店があった。普通の家の庭なのだろうか？離れた場所に家のようなものがある。その出店でカフェ・コン・レチェだけ頼んだら１．４€で源氏パイのようなお菓子がおまけについてきた。

一般の家の広い庭みたいな感じのところだった。

モリーナセカという村の少し手前で、道の悪い下り坂で私がヨチヨチ歩いていると四十代ぐらいの多分スペイン人の夫婦連れの、旦那さんの方が私を気にかけてくれて「私の腕につかまっていきなさい。」などという。奥さんのいる前で！しかしモラルの問題以前にそれは物理的に怖い。自力で歩く方が安全だ。だから「ノー、サンキュー」を繰り返してお断りする。しかし相手はなかなかしつこい。

でもようやく「そうですか？」と引いてくれたと思ったらその旦那さんが大きな段差で滑ってひっくり返った！大怪我はしなかったようだが相当痛そうだった。私は危険を避けて別のルートで降り、奥さんもいることだし一応心配そうな顔だけして見せてお先に失礼した。

なぜここにブータンのルンダが・・・？



こういう花をよく見かけた。

モリーナセカの街の入り口

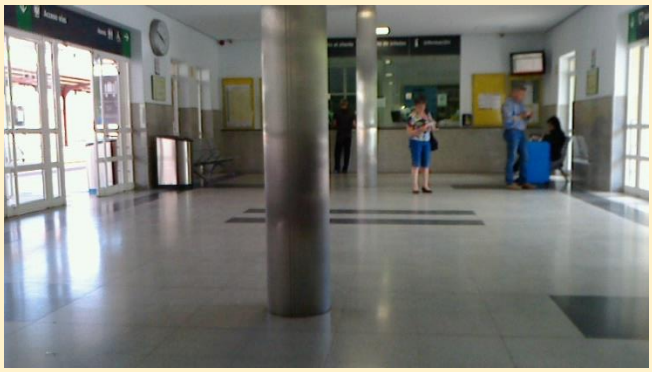
モリーナセカの入り口にバールというよりレストランという感じの店があり、そこでサンドイッチを作ってもらいトイレも借りる。サンドイッチは２．５€だった。ところでこの店ではサンドイッチを作ってもらったとき

「テイクアウト？」と聞かれた。英語のわかる人だったということだ。それからここでも韓国人のカップルに出会った。やはり韓国人の人たちはけっこう来ているのだ。それからモリーナセカの家々も青い屋根だった。

そのあとがけっこうきつかった。モリーナセカを出たのが十一時ごろ。ポンフェラーダまで７㎞と書いてあったので着くのは１３：００ということか、と思う。荷物に首を後ろに引っ張られるような感じで苦しみながら十三時ごろやっとポンフェラーダの町に入る。しかし線路は見えるが駅はどこなのかとても分かりにくい。親切な人々に道を尋ねながらようやくポンフェラーダの駅に到着。１３：３５であった。

ひょっとしたら昼過ぎくらいに出る列車があるのではないかと思って途中で食事もせずに頑張って歩いてきたのだが残念！１３：４４発のコルーニャ行きはサリアには止まらないんだそうだ。乗れるのは１６：１４発の列車で途中乗り換えがある。サリアまでの運賃は１６．９€だった。

ポンフェラーダの駅前



駅の構内。右奥に軽食の店がある。

食事や休養やメールをしながら待つ。サンドイッチは潰れていた。食パン二枚の間にハムと溶けたチーズが入っていた。クロックムッシュだったのかな。

ほぼ正確に列車はやってきた。駅員さんにチケットを確認してもらって乗る。その前に駅のカフェテリアでトルティージャとドーナツを買う。５€だった。けっこう高いな、と思った。それに包みが随分巨大である。理由はあとでわかった。

乗車して走り出したらすぐに検札が来た。全く車掌さんらしくない服装のおじさんが私の顔を見て何か言いたそうにする。しかし言葉が通じないとみて「誰か英語のできる人！」と探す。するとすぐさま「ハイ！」と手を挙げて名乗り出たのは私と英語やフランス語のボキャブラリーがさほど違わなそうなスペイン人らしき女性。（フランス語もわかる、となぜわかったのかというと、そのあと彼女と少し話をしたからである。）車掌さんの通訳として彼女が一生懸命何かを尋ねてくるが何を言っているのかさっぱりわからない。何か私に問題があるのだろうか？列車を乗り間違えたとか？それはないだろう。席が違う？それもないと思うけど…。

結局彼らが私に尋ねたかったのは、この列車がサリアまでは行かないのでモンフォルテ・ド・レモス駅で乗り換えなくてはならないことを私がちゃんとわかっているかどうか、ということだったらしい。わかってるよー、そんなこと。そのあとサリアからサンティアゴを目指すという人たち何人かと一緒になる。さっきの女性はルーゴから歩くそうだ。

ルーゴから歩くコースについては私は考えたことがなかったのでよくわからず「フーン…。」という感じだったが後から調べてみるとルーゴに行くにはモンフォルテ・ド・レモス駅から私が乗るのとは別の列車に乗り換えね

ばならないようだ。が、そのあと私はぼんやりしていて彼女が別の列車に乗り換えるところを確認しないでしまった。

モンフォルテ・ド・レモス駅で三十分の乗り換え待ち。でもこちらの駅は日本とはかなり様子が違う。とても開放的で列車が来るまで改札口も出入り自由である。いや、もともと改札口などというものはなくてホームと駅舎の間の出入りが自由だということだ。切符さえ買ってあれば問題はないのだ。ワンちゃんも普通に乗車が可能である。

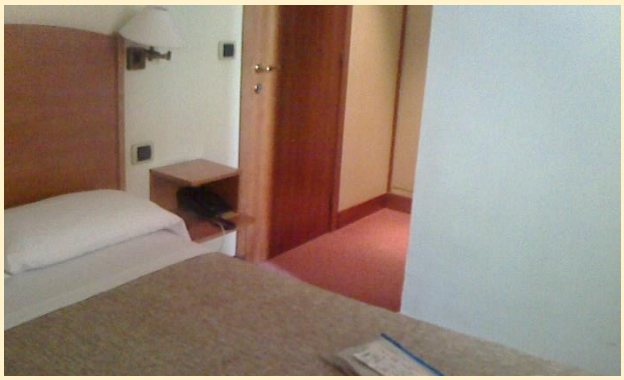
待ち時間の間に売店でスナック菓子を買う。１．８€であった。サリアに行く列車は十五分遅れでやってきて１８：５９に着く予定だったが１９：２０にサリアに着く。遅くなった。まずはホテル探しだ。

駅に一番近い「ＨＲ」と書いてあるところに入ってみる。これは二つ星くらいのホテルによくある表示である。フロントで「泊まれますか？」と尋ね、ＯＫと言われた気がしたがそのあとにスペイン語で何か言うのでもしかしてダメなの？と不安になる。そして一体何についてＮＯと言っていたのだかわからないのだが結局泊まれた。３９€であった。実は５０か６０を覚悟していた。だってなかなか豪華そうなインテリアだったんだもの。

１０６号室。三ツ星か四つ星といってもよさそうな立派な部屋だ。しかもバスルームにはバスタブもある。広いし、とても３９€の部屋とは思えない。そしてバイヨンヌのホテル以来十七日ぶりのバスタブに浸る。あ〜〜幸せ💕 三十分くらいしっかり浸かる。洗っても洗っても足から垢がぼろぼろと出る。無理もない。

食事はいつものようにつましく持ち込みである。今日は野菜や果物が手に入らなかったけど。ポンフェラーダで買ったトルティージャは大きなフランスパンに挟んであった。だから包みが大きかったんだ。後から覚えたがこういうサンドイッチをボカティージョというらしい。半分ほど食べてあとは明日に取っておく。そして食料の整理や点検をする。

ボカティージョ



サリアのホテルの部屋

【　下の部に　続く　】